

大阪人には  
自由な発想と壮大な構想力  
そして「胆力」があった



# 安藤忠雄

建築家

# 平野俊夫

大阪大学総長

適塾特別対談



刀傷の残る柱

## 若者たちの「がむしゃらさ、全力投球」が新しい時代を拓く

緒方洪庵が1838年に大阪・北浜に開いた「適塾」。その私塾から、福沢諭吉・大村益次郎・橋本左内など、「明治」を切り開いた有能な若者が育った。適塾が今の日本の基礎を作ったと言っても過言ではなく、我が国六番目の帝国大学として1931年に創設された大阪大学の原点でもあった。今回は、大阪を基盤に世界で活躍する建築家・安藤忠雄さんと平野俊夫総長が、大阪や関西の未来、世界適塾をめざす大阪大学の今後、若い人に伝えたいことなどを語り合った。

### 「独立自主」の精神

**平野** 安藤先生は、幾度か適塾を訪れてくださっていると伺いました。私塾としての適塾、そして緒方洪庵にどのような印象を持っておられますか。

**安藤** 私は大阪生まれの大阪育ち。関一(せきはじめ/第7代大阪市長)が造った東西44<sup>間</sup>・南北約4<sup>町</sup>の御堂筋や、岡田信一郎の原案により建てられた中之島の中央公会堂などを見て、「大阪はすごい」と誇りに思っていました。この適塾も大阪人の誇りですね。江戸末期の期待と不安の入り交じった緊張感が、福沢諭吉などの若者を生み出したのでしょう。福沢諭吉の「独立自主」の精神のように、自分で考えて自分なりに行動するという自立心を持った若者が時代を切り開いたのだと思います。

**平野** それに対して、今の若い人たちをどう思われますか。

**安藤** 適塾の時代は、多くの人たちが新しい時代に対する好奇心を持ち、自分に何ができるかを考え続けていました。今も科学の世界を例にとれば、素粒子などのミクロの世界と宇宙などのマクロの世界の探求が同時進行

するなど、好奇心のある人にとっては非常に面白い時代。江戸末期のような不安や緊張感は欠けていますが、次の時代を切り開くため、若い人たちは自分が何をすべきなのかを考えないとはいけません。

### 均一化された若者、思い切った転換を

**平野** 今の若い人たちも年金や医療など、将来や社会に対する不安を抱えていますね。

**安藤** とても現実的な不安ですね。私の場合は、大学教育や建築の専門教育を受けられなかったことで自分の将来に不安があり、常に自分の立ち位置を見据えながら走らなといけなかったと考えるようになりました。若い人が不安を突破するには、まずは一心不乱に、倒れてもいらいの覚悟で勉強するしかないと思います。また、地球人口が70億人を超えた時代を生き抜くために必要なのは「創造する力」ですが、その創造力に対する緊張感が薄いように思います。一流大学に入ると将来は安定し順調にいくと、思っている傾向があるのではないですか。

